

# 前置詞 above と over を比較する

嶋 田 裕 司

## *The Meanings of Above and Over*

Hiroshi SHIMADA

### 1. はじめに

この論文の目的は、英語の前置詞 above と over の本質的な意味を明らかにすることである。above と over の意味の類似点と相違点に関しては、辞書、論文、研究書などにおいて既に繰り返し論じられているので、再考する余地はないと言われるかもしれない。しかし、実際には、この2つは対等に論じられていたのではなく、over の意味の多様性を記述する際の補助手段として above が用いられることが暫らく続いていた。認知言語学においては、Brugman (1981) が over の多義性の分析を行って以来、over は主に動詞と結び付けて論じられてきた。たとえば、over the city という前置詞句における over の意味を考えるのではなく、The plane flew over the city. という動詞を中心とした文中での over の働きが論じられてきた。このような分析においては、動詞の意味の多様性に応じて over も多様な意義を派生するということになる。考察の中心は動詞の後の over にあり、above には、over の意味を照らし出す役割のみを与えていたに過ぎない。

above と over の意味を対等に論じたのは、Tyler and Evans (2003) である。彼らは over の基本的意味を動詞などの意味から分離して提案した後、over と above の基本的意味を対照することにより、両者の関係を論じている。それによれば、above も over も基本的には物理的空間の中で、基準となるもの (landmark) の上方に他のもの (trajector) を位置づける点で同じである。相違は、above がものを遠くに位置づけるのに対して、over がものを近くに位置づける点にあるという。〈遠く (distal)〉とは、2つのものが接触できない距離のことであり、〈近く (proximal)〉とは、2つのものが接触しうる距離のことである。すなわち、2つの語は、上方の空間を距離によって2分することによって、同一の物理的空間内で相補的に作用するとされている。

小論では、Tyler and Evans (2003) の説に代わる新たな仮説を提案し、これによって説明される事実群を挙げることを目的とする。彼らの説によれば、above と over は、基本的意味の場合、同一の物理的空間を分け合って、2つのものの関係を定めている。相違は、2つのものが接触しうるか否かを区分する距離だけである。それに対して、これから示す考え方においては、above と over は別々の空間内で作用する。above は、垂直軸 (vertical axis) の内部でのみはたらくのに対して、over は、垂直軸を用いるけれども、2次元的3次元的に広がる空間内で、ものの上方を指し示す。言い換えれば、above は、抽象度の高い線的空間を領域とするのに対して、over は、それより具象的な触知可能な空間を領域とする概念である。

前置詞の意味について論じる際には、英語母語話者の内省を資料とすることがしばしば行われる。事実、これから言及する文献においても、そのような手段で得た資料に基づく議論がなされている。しかし、この論文で展開する議論は、母語話者の直観的判断に基づく資料ではなく、実際に用いられた文章の中から選び出した使用例に依存する。その主な理由は、分析の主体が、英語を母語としていないこと、また、コンピュータを用いて豊富な実例を観察することができるようになったこ

とである。このことは、直観的判断に基づく研究を否定するものではない。母語話者による判断を、実例の観察によって補うことによって、より精緻な観察へと向かうことができると考えられる。したがって、2種類の資料は、補い合う関係にある。以下で提示する使用例のうち、出典が記されていないものは、すべてBBC News から引用したものである（注4を参照）。

## 2. 記述の前提

この論文の目的は、言語の意味を記述するための一般的概念を論じることではなく、2つの類似した意味を持つ前置詞の本質的な意味を見出すことである。したがって、意味論一般に触れることは最小限度にとどめることにする。しかしながら、これからの記述は、いくつかの前提の上に成り立っているので、その前提となる考え方を簡単に記す必要がある。

前置詞の意味を記述する際に必要な道具として、認知言語学で一般に認められている概念を受け入れる。特に重要なことは、前置詞の意味が素性の集合または抽象的命題として記憶されているのではなく、イメージ・スキーマとして表示されているという前提を採用することである。この考え方は、over を研究した Brugman ([1981], 1988: 9-10) に始まり、Langacker (1987, 1999)、Lakoff (1987: 453)、Dewell (1994)、Kreitzer (1997)、Tyler and Evans (2001, 2003) などに広く受け継がれている。

前置詞は、2つのものの関係を表すと言われることがある。しかし、ここでは、前置詞の意味は、ある空間内で、ものなどに基づいて指定される区域あるいは方向であるという前提で記述を進める。このように仮定すると、前置詞の意味が2つのものの関係と見えるのは、ものに基づいて前置詞が指定した区域や方向に、別のものを位置付ける操作が加わった結果であるということになる。この点は Langacker (1987) の考えとは少し異なるので、説明が必要かもしれない。Langacker (1987: 217) によれば、前置詞の機能は、ものとのものの関係を指定すること、より抽象的には、2つの事物と、その関係を指定することにある。たとえば、part of the wall という表現における前置詞 of は、part と the wall という2つのものの関係を表しているという。しかし、別のところで (p.286)、Langacker は、Hawkins (1984) が導入した探索領域 (search domain) という概念に言及する。探索領域とは、場所表現が対象物 (trajector) の存在する位置として限定する区域のことである。Langacker (1999: 53-55) は、一般的な前置詞の用法では、探索領域が潜在的であるのに対して、前置詞句が主語として用いられる場合には、それが顕在化するという。たとえば、the table beside his bed という表現においては、前置詞 beside が his bed に基づいて、the table の位置を定めることによって、2つのものの関係を指定するということになる。この例では、探索領域は潜在的であり、二者の関係が際立っているという。それとは対照的に、?Near the fire is warmer. という例では、前置詞句の探索領域が際立っているという。このように前置詞句を主語とした例は実際に用いられることがあり、この場合、探索領域が顕在化し、そこに warmer という属性が与えられていることになる。このように、Langacker は、前置詞の基本的意味は、関係であり、探索領域は特殊な場合を除いては潜在していると考えているようである。小論においては、逆に、前置詞の基本的意味は、ものに基づいて探索領域を指定することであると考ええる。別の対象を、その探索領域に位置づけることは、その対象と前置詞句を合成する際に起きることであり、前置詞それ自体の意味ではないと仮定する。なお今後、探索領域を「区域」と呼ぶことにする。

もうひとつ注意すべきことは、前置詞それ自体が表すのは、経路 (path, trajectory) ではなく、ある空間内の区域または方向であるということである。<sup>1</sup> ただし、以下の above と over の分析に関しては、方向ではなく区域が問題となる。それでは、一般に前置詞が経路を表すとされる場合は、



どのように考えるべきなのであろうか。経路とは、移動に付随する概念である。ものが移動するから経路があるのである。実際、前置詞が経路を表すとされるのは、移動の動詞に付随する場合である。もう一度、The plane flew over the city. を例にとれば、over the city が飛行機の経路と解釈できるのは、動詞 flew が移動を表すからである。例文を The moon hung over the city. に変えれば、over the city は月の位置を表すことになる。経路か位置かは、動詞の意味に依存して決まることであり、前置詞自体の意味ではない（嶋田（1998）を参照）。

認知言語学における前置詞の意味分析は、前置詞そのものの分析というよりは、むしろ動詞の補部としての前置詞の分析に力点が置かれていた。そのことは、多くの前置詞の分析が移動表現の分析から始まることが物語っている。また、意味記述の用語として、トラジェクター (trajector) とランドマーク (landmark) という語を採用したことに現れている。この2つの用語は、前置詞の意味記述で用いられ、さらには、文の主語と目的語に対しても用いられるよう抽象化されている。前置詞に限って言えば、トラジェクターは、ランドマークを参照点として位置づけられるものであり、その定義は移動を伴う場合にも、静止している場合にもあてはまるという (Langacker (1987: 217))。しかし、トラジェクターという語は、弾道・軌道を表す trajectory からの派生語であり、その基本的意味として〈軌道を通るもの〉という移動の概念があることを忘れてはならない。ランドマークは、基本的には、旅行者などが自己の位置を知るための目標である。いずれも、移動に関与する語であり、移動に関わる意味分析から前置詞の意味を始めることを示唆している。しかし、小論では、前置詞の機能は、それが前提とする図式の中に区域（探索領域）または方向を指定することであると考える。したがって、経路は、前置詞が本来持つ意味ではなく、前置詞の指定する区域の中に、動詞が位置づける概念である。

ここで用いる用語について、一言ふれておく。前置詞の機能を上で述べたように仮定すると、トラジェクターという概念は、前置詞の意味に直接的には関与しない。したがって、今後の記述では、先行研究に言及する場合以外は、この概念と用語は使用しない。しかし、従来、ランドマークと呼ばれている概念は必要である。以下の記述では、これを「基準」と呼ぶことにする。したがって、前置詞は、ある「基準」に基づいて、ある「区域」を指定するという言い方をする。

### 3. 先行研究

above と over を比較して問題とされるのは、近接性、影響力、真上という3つの概念である。

above と over の用法に関する比較は、論文や著書的一部分として語られることはあっても、それが主要な話題となることはなかったと思われる。それは、over の使用法が多様であるのに比べれば、above の用法が限られているので、両者が対等に扱われることがなかったためである。しかし、Brugman ([1981], 1988) 以前の前置詞に関する文献に2つを対比した記述が散見され、その後の over に関する議論では、動詞と over が結合した意味を記述するために above と over の比較をして議論を補っている。さらに、Tyler and Evans (2003) は、over の意味を動詞の意味などから分離して、その中心的意味 (proto-scene) を仮定した上で、above と比較している。この節では、それらについて記しておく。

Brugman ([1981], 1988: 41-42) は、above と over を比べて、相違点を2つ観察している。ひとつは、2つのものの親密さ (intimacy) であり、もうひとつは、一方が他方の真上にあるか否かである。(1) の例を示して Brugman は次のように言う。(1 a) の場合、衛星が地球から離れれば離れるほど、over の使用が不適切になる。また、(1 b) のように火で物を焼く場合には、over がふさわしい。つまり、over は親密な関係を表すのにふさわしいことになる。

- (1) a. The satellite is orbiting 100 miles above/?over the earth.
- b. We roasted marshmallows over/?\*above the campfire.
- c. Their apartment is above/over ours.

さらに、(1 c)については、彼らの部屋が我々の部屋の真上、すなわち、我々の部屋から垂直軸を上へ伸ばした所であれば、above も over も適切である。しかし、そこから外れた所にある場合には、適切なのは above のみである。(このような真上に関する観察は、すでに Wood(1967)、Leech(1969: 173)、Bennett (1975: 57) によってもなされている。また、Leech の観察は、小西 (1976: 139) が言及している。)

Taylor (1989: 112-113) は、Brugman の言う親密さという概念を、影響 (influence) という概念に変えている。つぎの例 (2 a) の意味合いは、ランプがテーブルの上方にあり、テーブルにかなり接近 (close) していて、影響を及ぼしうることだという。

- (2) a. The lamp hangs over the table.
- b. Pull the lamp down over the table.

影響があることは、(2 b) では明瞭になり、テーブルを照らすときには、over を above に代えることはできない。これは above が相互作用 (interaction) の無いことを示唆するからであるという。注目すべきことは、Taylor が、ここで、over には近接性と影響という意味合いがあることを指摘している点である。

Dewell (1994: 374-375) は、Brugman と Taylor の考えを受け入れて、above が2つのものが分離 (separation) していることを含意するのに対して、over は一方のものを他方の影響範囲内に位置づけるという。また、Kreitzer (1997: 308-309) は、真上ということに注目し、above が茫洋と広がる領域を指し示すのに対して、over は真上で比較的近いところに対象を位置づけると考えている。

Tyler and Evans (2003) は、それまでの研究を踏まえて、above と over の意味の比較を詳しく行っている。彼らは、その比較に先立って over の意味分析を行い、over の中心的意味が<経路>であるとする従来の説を退け、ランドマーク (LM) の真上で、かつ近い位置にトラジェクター (TR) を置くことが over の中心的意味であるとする。TR と LM が近接していることとは、機能的には相互に影響を与え合う関係にあることであるという。このように over の意味を規定した後で、above の意味を提案する。それによれば、above は LM の上方で、かつ遠い空間に TR を位置づける。TR と LM の関係が遠いということは、機能的には相互に影響を与えないということである。Tyler and Evans (2003: 112) は、つぎの例を示して、距離とその機能による仮説の正当性を主張する。

- (3) a. Nora twirled over the polished floor.
- b. Nora twirled above the polished floor.

(3 a)の表す状況では、人物 Nora が床に接触して踊ったということになる。それに対して、(3 b)では、接触の解釈が不可能であり、人物は空中かバルコニーで踊ったことになる。この相違は、彼らが仮定した over と above の中心的意味から直接由来することになる。

Tyler and Evans (2003) は、ものの関係が真上か否かという区別が副次的に生じると考えて、近接性とそれに伴う影響の有無を重視した解決案を提示した。それによれば、英語では、LM の上方

の空間を距離によって遠近2つに分け、遠い方に above を、近い方に over を割当てていることになる。つぎの節では、この仮説を否定し、新たな提案をする。

#### 4. above と over の本質的な意味

above と over について積み重ねられてきた観察結果を基に、Tyler and Evans (2003: 110-115) は、それぞれの中心的意味をイメージ・スキーマの形式で提案した。それによれば、above と over は、基準となるもの (landmark) の上方に別のもの (trajector) を位置づける点では同じである。相違は、その距離にあり、above が基準から遠い (distal) ところにもものを置くのに対して、over は近い (proximal) ところにもものを置く。この距離による区別に付随して機能的意味があり、above が接触しえないことを、over が接触の可能性のあることを表すという。

このような仮説が前提としているのは、2つの前置詞が同一の空間内で働き、相補的に場所を指定しているという考え方である。しかし、この前提を受け入れて、距離による説明を試みても、2つの前置詞の相違は明確にはならない。もうひとつの問題、すなわち、真上か否かの区別に直接的な説明を与えることができないからである。そこで、本論では、この2つが同一の3次元物理空間内で作用するという前提を否定した上で、つぎのように提案する。above と over は別々の空間を領域としている。above は、垂直軸 (vertical axis) という線的空間を領域とし、その内部に区域を指定する。それに対して、over は3次元の触知可能な広がり領域とし、その内部に区域を指定する。この前提の下で、それぞれの前置詞の基本的意味を次のように仮定する。

##### (4) above の意味

above は、垂直軸を領域とし、その軸上にある点を基準として、それより高い区域を指定する。その際、意味の焦点は、その点と指定区域との高度差に置かれる。

たとえば、above A という表現は、A 点を基準として、それより高い区域を指定する。注意すべきことは、基準となる点が抽象的な垂直軸上にあることである。たとえ A が3次元的具体物を指し示す名詞句であっても、above A という表現の解釈は、定義上、1次元垂直軸内でなされる。したがって、水平軸に沿った広がりには捨象されることになる。

##### (5) over の意味 (初案)

over は、3次元の空間を領域とし、その空間内にあるものを基準として、その上方に区域を指定する。基準となるものには、3次元空間内での大きさや形状があるので、指定区域もそれに応じた広がりをもつ。

たとえば、over A という表現は、A が指示する対象を基準として、その上方に広がる空間を区域として指定する。A が指示するものには、線、面、立体などのように、3次元的にまで広がる形状があるので、その大きさと形に応じた区域が指定される。したがって、over の解釈においては、3次元の広がりが必要となり、A の指示対象の上方のみが区域となり、A から外れる場所の上方は区域ではないことになる。また、区域は基準 A の上に接触しているので、その区域に別の対象が位置づけられるとき、その対象は A に接触することもあれば、接触しないこともある。どちらになるのかは、具体的状況によって決まることになる。<sup>2</sup>

above と over の中心的意味を以上のように仮定することによって、先行研究で観察されていた

事柄、すなわち、近接性、影響力、真上か否かの区別を扱うことができるようになる。above は、(4) の定義によれば、1 次元的な高度差のみを問題にするので、above が結ぶ 2 つのものには、当然、高度差があり、その結果、それらは、「離れ」ている、または、「遠い」関係になる。このことが機能的には、「影響がない」ことにつながる。また、above が真上でない場合にも用いられるのは、定義上、above が水平方向を捨象するからである。それに対して、over は、3 次元空間内にある対象と、その上方の区域にある対象を結果的に結びつけるので、その 2 つの対象は、over の領域である 3 次元的に広がる空間の中で、特別な〈まとまり〉として認識される。つまり、広い空間の中の 2 つのものなのである。そのことが、2 つのものは「近く」にあり、相互に「影響」を与え、しかも、一方が他方の「真上に」あるという認識を生み出すのである。

above と over に関する以上の考察は、前置詞の意味について（あるいは、意味一般について）考える際に注意すべきことを物語っている。それは、Lakoff (1987) が理想認知モデル (idealized cognitive model) を用いて、また、Langacker (1987) がベース (base) とプロファイル (profile) という概念を用いて、言葉の意味を特徴づけたことである。つまり、言葉は、意味それ自体を他のものから切り離して描き出すことはできず、必ず、背景となるモデルあるいはベースを設定して、その一部分を指し示す (profile) ことによって、意味を作り出すことである。したがって、基盤となるモデル（前置詞の場合は、それぞれの領域となる空間）が異なれば、たとえ同一の指示物を基準にしたとしても、意味として指し示される部分は、全く異なることになる。

さて、ここで、Tyler and Evans (2003) が、above に関する彼らの中心的意味によっては説明できないと考えた用例について考察しよう。彼らは、2 つのものが離れているときにのみ above が適切であると仮定した。しかし、反例があることにも気づいている (p.113, n. 2; p.120)。その例は、積み上げてある箱を前にして、ふたりの人が話をしている場面である。一人が、ある箱を指し示して、‘Is this the box you want?’ と質問し、相手が ‘No, not that box, the one above it.’ と答えた場合には、その箱 (the one above it) は、基準となる箱 (it) のすぐ上の箱、つまり、それに接触している箱であるという。これが事実であれば、2 つの問題が生じる。ひとつは、above によって、上に接触しているものを指し示していることであり、もう 1 つは、基準となる箱の上に複数の箱が重なっていても、指し示しているのは、基準の箱に接している箱であることである。この例を扱うために、Tyler and Evans (2003) は、above の派生的意味として〈直ぐ上 (the next one up)〉の意味を設定する。しかしながら、最初の問題点、つまり、この状況で箱が接触していることは、

(4) の新たな提案では、問題とはならない。なぜなら、上下に隣り合った 2 つの箱は、above の領域の垂直軸上では 2 つの点となり、3 次元空間で接触していることが捨象されるからである。それに対して、第 2 の問題点、つまり、基準となる箱の直ぐ上の箱を指すということは、(4) のみによっては解決できない。おそらく、この問題は、あるものを指し示す際の参照点 (reference point) に対する認知上の問題に関係があるのであろう。たとえば、指し示す対象となる候補が複数存在する場合に、参照点（この場合は基準となる箱）に最も近いものが選択されるというような原則があるのかもしれない。これは興味深い問題であるけれども、これ以上追及せずに、未解決のまま残すことにする。<sup>3</sup>

## 5. 使用例が示す above と over の意味

前節では、(4)、(5) として提案した above と over の意味によって、先行研究で観察された基本的な事実がほとんど説明できることを見てきた。本節では、実際に文章の中で使用された above と over を観察することによって、上の提案を補強することにする。母語話者の作例をもとにした内省

による意味記述とは、異なった種類の事実群が見えてくることになる。<sup>4</sup>

### 5.1. 基本的用法

最初に、真上か否かという問題に関わる使用例を観察しよう。上の提案の帰結として、above は水平方向の広がりを見無視するので、真上でなくてもよいのに対して、over は水平方向の広がりも考慮するので、真上でなければならないことになる。つぎの例は、above の指定区域が基準の真上ではありえない場合である。

- (6) a. We were on the Ethiopian plateau, above the town of Zalambessa, which was occupied by Eritrean forces for two years.
- b. We came upon some nomadic fishermen living in ragged tents pitched above the sea, and I asked if we could buy some fish.

(6 a) では、町より台地の方が高く、(6 b) では、テントを張った所が海より高いことが言われている。現実世界の知識に整合するように解釈するためには、標高差のみを選び出し、真上の可能性を排除しなければならない。対照的に、over を用いた以下の例では、区域が基準の真上にあると解釈せざるをえない。なぜなら、(7 a) と (7 b) は、どちらも海と陸を基準にして、その真上に広がる空間を対比しているからである。

- (7) a. It seems to me that some of the preliminary work could be done over the sea rather than over the land, which it seems to me would be safer.
- b. I think the original route was to be more overland, but it was decided to head out over the sea.

over の役割は、3 次元的に広がる空間内の区域を選び出すことである。区域は、他の区域と対比するためには、基準に付随するものとして、真上にあると解釈せざるをえない。

above が高度差のみを選び出して区域を指定し、over が立体的広がりのある区域を指定することは、つぎの例における above the sea と over the Atlantic Ocean の使い分けにも現れている。(8) の例では、いずれも X metres above the sea の形式が用いられ、X に具体的な距離を入れて、海面からの高さを指定している。興味深いことに、above を over に代えて、\*X metres over the sea という句を探しても、使用例は見つからない。実例として現れるのは、(9) のように固有名詞を用いた X metres over the Atlantic Ocean などである。

- (8) a. The highest point of a rig is its flame tower, which is about 70 metres above the sea, ....
- b. Flying at 500m above the sea, the crew members were able to make out porpoises in the water ....
- c. ... in order to confuse the enemy, they flew at maximum speed and 15 metres above the sea in the direction of the Antarctic ....
- (9) a. The plane flew at 270 metres over the Atlantic Ocean on autopilot.
- b. The plane ... reached 1350 mph (2172 kph) and 60000 feet (18288 metres) over the Atlantic Ocean during its final flight.

- c. The aircraft ... flew at under 100 ft (30 metres) over the Red Sea to avoid Egyptian and Saudi radar.

the sea でも the Atlantic Ocean でも実質的には同じ対象を指し示すことができるはずである。しかし、使用例には偏りがあり、(8) と (9) の例はあるのに対して、\*X metres over the sea と \*X metres above the Atlantic Ocean/the Red Sea の類は見つからない。以上のような使い分けが実際にあるとすれば、どのように説明できるのであろうか。(4) と (5) の本質的意味に従えば、海面からの高さを主に表したいのであれば、(8) のように above がふさわしく、この場合、the sea が指すのは海面であればどこでもよいのである。また、どの海の上かを表したいのであれば、(9) のように over がふさわしく、固有名詞を用いることになる。おそらく、\*X metres over the sea の形が見つからなかったのは、この形が不可能であるからではなく、用いる状況が実際には無かったからであろう。このように over を用いると、海 (the sea) は暗黙のうちに陸 (the land) と対比されることになり、その上で、それぞれの高度まで対比することになる。そのように複雑な文脈は、実際には生じにくいであろう。

もちろん、X metres が付かなければ、上の (7) のように over the sea の使用例はある。このような場合は、区域は (陸と対立する) 海の上に設定するだけであるので、その区域に位置づけられる物事の海面からの高さは over によっては決まらない。それを決めるのは、現実世界に関する知識である。たとえば、(10) の例では、over the sea が指定する区域に、連絡船の航路、爆発物の投棄、嵐の通過という事象を位置づけている。それぞれの事物の性質によって、区域の中のどこに位置づけられるのか、決まってくる (注2を参照)。

- (10) a. A new ferry link over the sea to Skye is to link two of Scotland's most remote communities.  
 b. The 138 Lancaster bombers dumped their explosives over the sea - as was normal practice to ensure a safe landing.  
 c. The storm was expected to intensify as it passed over the sea on its way to Mozambique, the South African Weather Bureau said.

さて、つぎに over が点ではなく、広がりのあるものを基準にすることを示す証拠を見よう。今まで、above the sea と over the sea という表現を観察してきた。ところが、level を用いた表現 above sea level は (11a-b) のように使われるのに対して、\*over sea level は使用されない。同様に、above ground level は (11c) のように使われるけれども、\*over ground level の使用例は見出せない。このことは、どのように説明できるのだろうか。

- (11) a. ... I am fairly certain that the Basin Reserve is above sea level. Bourda at Georgetown in Guyana is definitely below sea level.  
 b. Titicaca lies 3800m (12500 feet) above sea level between Peru and Bolivia.  
 c. The fire was 150ft above ground level, which was high for firefighters to tackle.

the sea は、物理空間に広がる海を指し示しているので、above the sea の場合には海の表面を垂直軸の1点に写像し、その点を基準として垂直軸上の上方の区域を指定する。over the sea の場合には、物理空間内にある海を基準として、上方に広がる空間をその区域として指定する。それに対し

て、sea level または ground level は、抽象的な垂直軸上に想定された高さを測るための原点であり、広がりを持たない。したがって、above が基準として利用することはできるけれども、over は、3 次元的な広がりのある基準を求めるために、これらを基準とすることはできないということになる。

しかし、over が物理空間のみで作用すると考えると、説明の付かない事実がすぐに出てくる。それは、over が高度を表す数値を基準に取る場合である。下の例では over が、長さを表す数値を基準として、その長さを越える高さを表している。たとえば、(12a) では、ダビデ像の高さが 5 メートル以上あることを、(12b) では、軍艦の高さが 9 メートル以上あることを表している。また、(12c) と (12d) では、それぞれ、噴煙と山の高さが明示された数値を越えることを表している。

- (12) a. The huge naked figure of David, over five metres high - nearly three times life-size - stands on a new plinth in the Accademia Gallery under a small glass dome, . . . .
- b. The 143-metre-long frigate, which is over nine metres tall, is powered by two gas turbines and diesel engines . . . .
- c. Molten rock and mud poured down for several hours and a huge cloud of ash rose over 10000 metres (35000 feet) high.
- d. Mount Everest is the highest mountain in the world at over 8850 metres (29000 ft) high, . . . .

この場合の数値は、垂直軸上に割り振られた目盛りとしての点にあたり、物理空間に存在するとは考えられない。したがって、\*over sea level が用いられないのは、sea level が物理空間内の概念ではないからであると説明するのであれば、over five metres も five metres が物理空間にないという全く同じ理由で用いられないことが予測され、(5) の over 意味は事実合わない結果をもたらすことになる。

それでは、\*over sea level が使われず、over five metres が使われる理由は、何であろうか。その理由は、sea level が高さを測るための原点として、純粹に点としてのみ解釈されるのに対して、five metres は直線上の原点から 5 メートル離れた点という解釈のほかに、5 メートルの長さ、つまり線的広がりという解釈があるからだろうと思われる。上の (12a) の over five metres という表現は、垂直軸上に広がる five metres という長さを基準にして、その上方にあり、しかも、その長さに応じた区域を指定していると考えよう。(12) の場合には、指定された区域が基準の長さに継ぎ足され、元の基準より長い長さを指定することになる。それに対して、\*over sea level が使われないのは、基準である sea level が点であるために、それに応じた広がり over によって指定できないからである。そこで、over が使われるのは、3 次元的な物理空間であるという仮定 (5) を捨てて、つぎのように仮定すれば、上の問題は解決することになる。

### (13) over の意味 (改訂案)

over は、その基準となるものに広がりがある場合にのみ使用され、基準に応じた区域をその上方に指定する。

ここで言う広がりとは、1 次元、2 次元、3 次元のいずれでもよく、over five metres の例は、1 次元的な場合ということになる。また、基準に応じた区域とは、絶対的な大きさの区域ではなく、基準の大きさに見合う大きさの区域ということである。したがって、over five metres と over



10000 metres では、基準の広がりが違うので、それに応じて指定区域の広がりも異なることになる。

上の例を扱う際に、over five metres などの前置詞句が区域を表すのではなく、原点からの長さを表すと考えた。実際に (12) の例は、彫像、船、噴煙、山の高さを記述しており、それぞれ垂直方向への広がり(長さ)を持っている。もちろん、このような例がすべてなのではない。つぎの (14) のように、原点からの長さの無いものが指定区域に位置づけられることもある。(14 a) では、we の指示物に、また、(14b) では、some of them の指示物に、垂直な広がり認められないため、それらは、基準の上方に over が指定する区域に完全に入っていると解釈される。つまり、(14a) では、標高3000メートルをはるかに越える所に我々が居たのであり、我々の長さが3000メートル以上あったのではない。

- (14) a. We were well over 3000 metres above sea level and at least one of us was feeling the effects.  
 b. At over 3500 metres above sea level, some of them are the highest inhabited places on earth.

したがって、over の意味 (13) は、具体的な解釈を与えられるとき、2通りに実現することになる。一方は、(12) のように基準の長さに指定区域を継ぎ足して、より長いものを表す場合であり、他方は、(14) のように基準の長さは付加せずに、区域のみを指定する場合である。

さて、つぎに、above に目を移そう。above が数値を基準とする場合には、over の用例 (12) とは対照的に、その数値を垂直軸上の点として概念化して、それを基準にして上方の範囲を指定している。つぎの (15a-d) の例においては、登山者の死という事象、航空機の通過可能な高度、観測施設、気球の到達点が指定区域内に位置付けられている。

- (15) a. Between 1968 and 1987, 23 British climbers died above 7000 metres on peaks.  
 b. Aircraft can only pass over these sites at altitudes above 5500 metres, which means commercial flights should not be affected.  
 c. The Paranal site is 2600 metres high, while US Keck facilities in Hawaii are above 4000 metres high.  
 d. Vijaypat Singhania's balloon rose above 21000 metres to beat the previous best.

これら例において、物事は、above が指定する区域内に完全に収まり、over による (12) のように、対象物が原点から測れる長さを持っているのではない。したがって、above の意味に関する仮定 (4) は、このように数値を基準とする場合にも、そのまま成り立つと考えられる。

## 5.2. 派生的用法

above が垂直軸上の概念であり、点を基準とすること、それに対して over が広がりのある基準を持つことは、つぎの例群からも窺い知ることができる。(16) は “above 100” という文字列を含む例であり、(17) は “over 100” を含む例である。“above 100” を含む (16a-d) の例は、それぞれ、人数、気温、速度、割合 (百分率) に関する数値を表している。

- (16) a. The number of internet users in China has risen above 100 million for the first time, ....

- b. Texas has recorded daytime temperatures of above 100° Fahrenheit (37° Celsius) for 20 days in a row, ....
- c. It concluded that all trains travelling above 100 mph (161 kmh) should be fitted with the European Train Control System (ETCS) by 2010.
- d. Zimbabwe's crisis has seen... the inflation rate soar above 100%.

いずれの概念も、物理空間に直接関与する垂直軸ではなく、物理的な垂直軸をそれぞれの領域に投射して数値の配列を構造化した比喩的概念である。このような比喩的用法においても、above は数値を基準にして、その上方に他の数値の存在する区域を指定している。

上の例と、つぎの“over 100”の例を比較しよう。(17a-c)では over 100 people、(17d)では over 100 films が、それぞれ人の数と映画の数を表している。これらは、“above 100”の例群で観察した数値に似ているけれども、決定的に異なる点がある。それは、over 100 people と over 100 films が事象の参与者になっている点である。

- (17) a. Over 100 people attended the meeting in Haverfordwest.
- b. Bird flu has killed over 100 people worldwide.
- c. ...an operation mounted by the federal police arrested over 100 people....
- d. She made her cinema debut at the age of 15 and appeared in over 100 films.

それぞれの例文が表現しているのは、人々が、会議に出席したこと、病に倒れたこと、逮捕されたこと、あるいは、人物が映画に出たことである。表現されているのは、数値の範囲を直線上に指定することではなく、ある数の人や物がある出来事に関与したことである。たとえば、(17a)では over 100 people は、100 people が占めるまとまりを基準にして、それより大きいまとまりとなる人々が会議に出席したと解釈すると考えられる。このとき over は、数直線上の点としての人数ではなく、身体を持つ人々のまとまりという広がりをもった基準にしていると考えられる。

above と over を対比する例群を、もうひと組見ることになろう。売買に関わる“sold above”と“sold over”という文字列を含む表現を対比すると、above は値段を表し、over は商品の数量を表わしていることがわかる。above の例(18a-b)では、競売品が評価額より高い価格で売れたことと、入場券を額面より高く再販してはならないことが表現されている。

- (18) a. Three of the star lots also sold above estimate, with Bacon's Self Portrait going for £5.16m - almost three times its £1.4-£1.8 million guide price.
- b. The Welsh Rugby Union said it clearly stated on each ticket that they are not to be re-sold above face value.

いずれも、above は値段という垂直軸上で、estimate と face value という点を基準にして、それより上方に価格が存在する区域を指定している。

それとは対照的に、over の例(19a-b)に目を移すと、over が指定するのは、本の冊数とアルバムの枚数である。本とアルバムは、売る行為の対象になっている。

- (19) a. The book, published last September, has sold over one million copies.
- b. The band have sold over 100 million albums worldwide....

ここでも over は、(19a)の場合、one million copies を量的広がりのある本のまとまりとして扱い、それより多い本の山を表していて、それ全体が売られたと解釈できる。(19b)についても、同様の解釈が成り立つ。上の(17)の例で観察したのと同様に、ここでも、over の付く表現は、事象の参与者としての役割を果たしている。

つぎに、年齢の表現に above と over が現われる場合について触れる。人の年齢に関しては、over の方が使用頻度は高いけれども、above と over どちらも用いられる。(20) の例は、the age of X、(21) の例は、X years old であり、それらが above と over のどちらの基準にもなりうることを示している。

- (20) a. Under Swiss law, men above the age of 18 have to be ready for a call to service,  
....  
b. Citizens over the age of 18 may vote.
- (21) a. This man must have had a hatred for women above 50 years old as his own mum didn't make it there.  
b. The democratic elections being held next week will allow anyone over 18 years old to vote.

above が用いられる使用例は、年齢を垂直軸によって概念化し、年齢の目盛りの付いた線上に人を位置付けると仮定すれば、扱うことができる。over は、広がりのあるものを基準とするので、年齢が above の場合のように垂直軸として概念化されている場合でも、水平の広がりや立体的量として概念化されている場合でも扱うことができるので、over に関して年齢がどのように概念化されているのかという問題は、未解決の課題として残すことにする。

最後に、年月、時間などの期間を表わす表現を見ることにしよう。結論から言えば、期間の表現には、over が現われ、above が用いられることはない。期間が広がりであるとすれば、これは当然の帰結である。たしかに、時間を含む表現に above が用いられることはある。しかし、その場合に above が表すのは、期間ではなく、数値の区域である。たとえば、(22a-b) では、above 60 hours と above their contracted hours は勤務時間数が基準を上回ることを表しているのであり、勤務した期間を表すのではない。このような場合には、垂直軸によって時間数が構造化されていると考えられる。

- (22) a. ... more than nine out of every 10 of the head teachers said they worked above 60 hours every week.  
b. As of August 2003 ... more than a half of senior house officers were still working above their contracted hours.

期間を表す典型的な表現である for 前置詞句に目を向けよう。for 前置詞句の中では、over が現われることはあるけれども、above が現われることはない。たとえば、(23a) の for over twenty years のような例は、ありふれた例である。しかし、above を用いた \*for above twenty years のような使用例を見出すことはできない。

- (23) a. I have been a Mac user for over twenty years....

- b. Some houses were without electricity for over two days.
- c. Christine cried for over two hours yesterday ....

このように over が用いられることは、期間に広がりがあることを示唆している。それでは、その広がり方は、垂直方向なのか、水平方向なのか、それともある種のかたまりなのだろうか。今のところ、期間は水平方向への広がりで見なしておくことにする。さらに具体的に言えば、期間は、物理空間内の道（経路）に重なって存在すると考えてもよいであろう。ある経路を通してある距離を進めば、それに相当して時間がかかるという経験が、経路と期間の関係を支えていることになる。つぎの例では、for を用いずに、直接 over によってある期間を表している。

- (24) a. Over the years I've been able to interview presidents and prime ministers.
- b. Over the weeks, she gradually became more and more aware.
- c. It's hard to imagine what she must have been through over the past days ....

先ほどの例 (23) では、たとえば for が期間を明示して、over が twenty years を越えた長さを表していたのに対して、こちらの例 (24) では over が the years を基準にして、その上方にある区域を指定する。主体（人物）は、何かを行いながらこの区域を通過するというのが、この文の構造であると思われる。このように、期間が物理的な経路に重なる概念であるという仮定は、Lakoff and Johnson (1980) の時間のメタファーに従う考え方である。

以上で、above と over に関する観察を終わる。同じ上方という概念に依存していても、above の意味は、垂直軸上の区域であるので、線的で、単純である。それに比べて over は、基準としてとるものに広がりをもつので、基準の広がり方によって指定区域の大きさや形が様々に決まってくる。使用例に基づいた観察によって、この相違が明らかとなった。

## 6. おわりに

この論文の目的は、above と over という 2 つの前置詞の意味を比較することによって、よく似ているけれども、どこかで確実に異なっている 2 語の類似点と相違点を明らかにすることにあった。英語の前置詞は、もちろん他にも数多くあり、2 語に限定して考察するのみでは、前置詞一般のはたらきを見失う恐れがある。また、この方法では、他の前置詞の個々の使用法についての知識も得られない。このように考えれば、話題を 2 語に限定するよりは、より広い視野から多くの前置詞を体系的に記述する方が、研究方法としては有効であるという答えが出てくるかもしれない。しかしながら、above と over の 2 語の比較研究を実りあるものにするためには、この 2 つだけを見つめているだけでは済まされない。意味とは何か、また、前置詞の意味構造とは何かという、より一般的な問いに対する答えにもなるよう、2 つの語の意味を推測し仮定しなければならない。したがって、このような見地からなされた比較研究は、たとえ 2 語のみを扱ったとしても、前置詞一般に対する理解を深めることにつながる。本論で提案した above と over の意味記述と、その前提となる前置詞の意味一般に関する仮定が、この 2 つのレベルの理解につながることを望む。

つぎに、資料（コーパス）を用いた前置詞の研究について述べておきたい。先行研究でなされた観察は、母語話者としての言語学者が主に内省によって行ったものと思われる。それに対して、本論で提示した用例は、すべて実際に使用された言語資料からの引用である。内省と使用例、どちらにも長所があり、欠点がある。内省の長所は、多義性や最小対立に関して、その意味を直接観察で

きる点であり、欠点は、分析する本人に都合のよい解釈に陥る危険があることである。それに対して、使用例による研究の欠点は、話者の直観を直接観察できない点である。しかし、その長所は、話者の内省という狭い範囲を越えて、多様な表現を多数観察し、各事例について考察できる可能性があることである。しかも、それぞれの表現が使用された場面と文脈は比較的明瞭である。本論の後半では、使用例による研究のこのような長所を活かすことを試みた。たとえば、検索エンジンを使用して興味深いと感じたことは、(16)と(17)に示したように“above 100”と“over 100”という2種類の文字列の検索結果が対照的であったことである。内省に頼るだけでは、これほど明瞭な用例群には辿り着きにくいであろうと思われる。

最後に、概念の空間化という問題に触れておきたい。基本的な物理空間を扱うとき、aboveは垂直軸上の高度差のみを抽出し、overは広がりのあるものの上方に区域を設定する。この2つが、物理的上下のない概念に対して、比喩的に用いられる場合を5.2節で調べた。aboveは数値として扱われる概念(人数、気温、速度など)に用いられ、overは具象的まとまりに対して用いられる。この相違を利用すれば、非物理的概念がどのように空間化されているのか調べることができのかもしれない。本論の最後では、年齢と期間に関して、どちらの前置詞が用いられるのかを調べた。このような手法で他の概念の広がり方を調べる可能性が開かれている。

#### 注

- 1 「区域」については、aboveとoverに関して以下で論じる。「方向」とは、たとえば、She sat with her back to the wall.やShe faced toward the sea.における前置詞句が表す意味のことである。
- 2 overの意味(5)は、接触に関して中立的である。2つの例文、The boy jumped over the wall.とThe boy climbed over the wall.が示すように、2つのもの(ここでは、少年と壁)が接触するか否かはover以外の要因によって決まる。
- 3 「参照点」については、Langacker (1987, 1999)を参照。
- 4 提示する使用例は、すべてBBC Newsからの引用である。資料は、2006年6月から9月の間に、検索サイトGoogleを用いて収集した。なお、使用例中の下線は、注目する箇所を明示するために、筆者が施したものである。

#### 参考文献

- Bennett, David C. (1975) *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions: An Essay in Stratificational Semantics*. Longman.
- Brugman, Claudia M. (1981) *The Story of Over*. MA Thesis, Department of Linguistics, UC Berkeley. Published in 1988 as *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*. Garland Publishing, Inc.
- Dewell, Robert B. (1994) "Over again: Image-schema Transformations in Semantic Analysis." *Cognitive Linguistics* 5-4, 351-380.
- Hawkins, Bruce W. (1984) *The Semantics of English Spatial Prepositions*. Ph. D. diss., University of California, San Diego.
- Kreitzer, Anatol (1997) "Multiple Levels of Schematization: A Study in the Conceptualization of Space." *Cognitive Linguistics* 8-4, 291-325.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.

- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume I, *Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Leech, Geoffrey N. (1969) *Towards a Semantic Description of English*. Longmans.
- Taylor, John R. (1989) *Linguistic Categorization : Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford University Press.
- Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans (2001) "Reconsidering Prepositional Polysemy Networks : The Case of *over*." *Language* 77-4, 724-765.
- Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions : Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge University Press.
- Wood, Frederick T. (1967) *English Prepositional Idioms*. Macmillan. (R.C. ゴリス・宮内秀雄 訳  
(1979) 『ウッド英語前置詞活用辞典』秀文インターナショナル)
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』大修館書店
- 嶋田裕司 (1998) 「移動表現：心的映像と抽出理論」『群馬県立女子大学紀要』第19号 (63)-(75)

BBC News <<http://news.bbc.co.uk/>>